# 19章

## 【問題】（演習）

出典…中沢新一『工房哲学』／オリジナル問題

**文章略解**

アールヌーボーは、本来的に素材の特性に合わせて技術を発揮する職人の営為と、無秩序の中から美を抽出しようとする十九世紀の芸術精神との出会いによって出現した。そこに見られる表現は、近代個人主義の呪縛から限りなく自由な立場での、異教的な伝統の発露でもあった。さらに、自らの出自である「無」と相互に浸透する日本の浮世絵の生命の形象に、みずからの哲学を体現した美を見いだし、それを吸収することによってまったくユニークな美の形象を創出したのである。

## 解答

(一) 作家の個性より、扱う素材の物質的特性に合わせて技術を発揮して作品をなすのが第一の特徴であるということ。

(二) 統一的で安定した秩序世界が失われた中で、言葉や色彩や形態の力で新たな美的世界を構築しようとするということ。

(三) 十九世紀末の芸術思想の趣旨である無秩序の中からの美的形象の抽出は、それ以前から伝統的工芸職人が実践してきたものだから。

(四) 生命が、他と峻別された存在としてではなく、その出自である混沌と相互に転換し得るものとして描かれているということ。

(五) 作家の個性の発露であるより、工芸として素材の物質性に立脚し、自然の無秩序の中から美を形象化しようとするアールヌーボー

の精神は、個とその母胎である混沌との関わりの表現である職人的な工芸を発達させてきた日本人の伝統的な美的感覚と通底するから。〔119字〕

(六) a＝頽廃（退廃）　b＝没頭　c＝魅惑　d＝創出

## 【問題】（自習）

出典…『更級日記』　／　オリジナル問題

### 現代語訳

次の年の（陰暦）八月に、（お仕えする宮さまが）宮中へおいであそばしたときに、一晩中（清涼殿の）殿上の間で管絃の催しがあったところ、この（以前に言葉を交わしたことのあった男の）人が（その席に）伺候していたのも知らずに、その晩は（私は自分の）局で明かして、渡り廊下を兼ねる建物の引き戸を開いて（空を）見やっていたところ、夜明けを控えた月が、あるかないか（のかすかな光で）風情があるのを見（てい）ると、（催しが終わって退出する殿方たちの）履き物の音が聞こえて、（歩きながら）お経の一節を唱えなどする人もいる。（その）お経を唱える人は、私の（いる）引き戸の入り口に立ち止まって、何か話しかけなどするので、答えていると、（その殿方は私がかつて会話した相手であると）ふと思いだして、

「時雨の夜（のしみじみとしたこと）が、ほんのひとときも忘れられず恋しいものでございますよ」

と言うのだが、長々と返事をすることができる場合でもないので、

なにさまで……どうしてそれほどまでに思い出して（くださって）いらしたのでしょうか。（あの晩の私どもの歌は）ほんのちょっと木の葉に降りかかった時雨ていどの（つまらない言の葉ばかりほどの）ものでしたのに

とも最後まで言い終わらないうちに、他の人々が通りかかったので、そのまま（私は奥の局へ）すべりこんで入って、その晩のうちに（そのまま宮中から）里へ下がってしまったので、（あの昨年の時雨の晩に）いっしょだった（仲間の女房の）人を探しあてて、（あの男性が私の「なにさまで……」の歌に）返歌をくれていた（こと）なども後で聞く（ことになったのだった）。「『以前の時雨の（晩）であるような（とき）に、なんとかして琵琶の曲で（自分が）知っているだけ全部を弾いて（あなたに）聞かせたい』ということでしたよ」と伝え聞いたので、（その、あの方が弾く琵琶の音色がぜひ）聞いてみたくて、自分もそ（んな音楽の夜）に相応しい機会を待つのだが、（生憎そんな好機は）一向にない。

（さらに翌年になって）春のころ、のどかな夕方に、「（あの方が）参上しているようだ」と耳にして、あの晩にいっしょだった（仲間の女房の）人と（端近くに）すべり出（ようとす）るのだが、（御簾の）外には人々が参上し、（部屋の）中にもいつものように（他

の女房の）人々がいるので、（私たちは照れくさくて端へ）出るのを途中でやめて（やっぱり部屋の）中へ引っ込んでしまった。あの（男の）人もそのように（わざわざ私たちを呼び出すのも憚られるとでも）思ったのだろうか、（せっかく）物静かな夕方（の人が多くないとき）を予測して参上したのであったのに、ざわざわと落ち着かないので退出するようだ。（そこで私は、）

かしまみて……加島を見て鳴戸の浦に漕がれ出る、というわけではありませんが、にぎやかなうちにも（適当な）間を見て（琵琶の音の）鳴る（かもしれない）戸口まで焦がれ出る、（この私どもの）気持ちはおわかりくださいましたか、磯の海士人（のようなあなたさま）よ

と（詠んだ）だけで（その歌を贈ることもできないまま）終わってしまった。あの（殿方の）人柄も、たいへん実直で、（女と見れば声をかけたがる）世間一般の（男性たち）とは違う人で、（私たちのことを）「その人は（どうしていますか）、あの人は（どこにいるのだろうか）」などと詮索したりすることもなく（時が）過ぎ去ってしまった。

**解答**

(一) ア＝長々と返事をすることができる場合でもないので
イ＝私はその晩のうちに宮中から里へ下がってしまったので
ウ＝あの男性がこの御殿に参上しているようだ

(二) 周囲の人目が気になったために、作者と仲間の女房とは端へ出るのを途中でやめて部屋へ戻ってしまったということ。

(三) 地名の「鳴戸」ではないが、琵琶の音のするはずの戸口まで焦がれ出る私どもの気持ちはおわかりくださいましたか

(四) 男性の性格が世間並みに好色ではなく実直だということ。

**解説**

(一) ア　傍線部は「言（名詞）＋長う（形容詞連用形ウ音便）＋答ふ（動詞終止形）＋べき（助動詞連体形）＋ほど（名詞）＋なら（助

動詞未然形）＋ね（助動詞已然形）＋ば（助詞）」と品詞分解できる。「言長し」は「長々としゃべること」を意味する連語で、続く動詞とあわせると「だらだらと返事をする」といった意を示すことになる。助動詞「べし」は《当然》の意を基本とするが、否定文中にあるときはその否定の意とあわさって《不可能》を意味することが多く、本文脈でもこの解釈が妥当である。「ほど」は一般に「身分・年齢・時・長さ・広さ・重さ」など程度をもつことすべてのかわりに使える語で、訳出には前後の文脈の理解が不可欠である。ここでは、宮中での音楽会が終わった明け方で、他の男性たちが続々と退出してくる途中にいての表現であることに鑑みて、「時」に関する表現と見て、「場合・状況」程度の訳語が適切である。「なら」は体言に接続することから《断定》の助動詞とわかる。「ねば」は言うまでもなく《打消》の《順接確定条件》の表現である。

**イ**　傍線部は「そ（名詞）＋の（助詞）＋夜さり（名詞）＋まかで（動詞連用形）＋に（助動詞連用形）＋しか（助動詞已然形）＋ば（助詞）」と品詞分解される。「そ」は指示代名詞なので（現代語では「その」が一語化して連体詞となるが、古文では「そ」だけで独立して使えることにも注意しておこう）、一般には指示対象を明示する必要があるのだが、本問では解答欄の大きさの制限から、後続語とあわせて「その夜」とでもしておけば十分であろう。「夜さり」は「夜しあり」がつづまって体言化した語で、この中の「し」は本来《強意》の副助詞にすぎない。「夜去り」と間違いやすいので注意。関連語に「夕しあり」の縮まった「夕さり」がある。「まかづ」は貴所から退出する意を示す謙譲語本動詞。「に」はこれが連用形であり、直下に「しか」すなわち《経験過去（直接体験の回想）》の助動詞を伴うことから、《完了》の助動詞だとわかる。「ば」は已然形接続で、《順接確定条件》の接続助詞。これらをもれなく繋いで逐語訳を作る。その上で、傍線部を含む文中には主体も退出してきた場所も示されていないので、文脈から推定して補充する必要がある。主体については、傍線部から遡ってゆくと、文章冒頭より「作者は宮中にいる（〔注〕参照のこと）」「男性から言葉をかけられる」「歌を詠んで返事しようと思ったが人が来たので中へ引っ込む」「退出する」といった一連の流れが見え、また傍線部中の「しか」が《経験過去》の助動詞であることからも、傍線部は作者自身の行為だとわかる。さらに右に確認した流れから、作者のいた「貴所」とは宮中だから、「まかづ」は「宮中からの退出＝実家への帰宅」のことだと考える。

**ウ**　傍線部は「参り（動詞連用形）＋た（助動詞連体形撥音便無表記）＋なり（助動詞終止形）」となっている。「参る」は「貴所に近寄る」意の謙譲語本動詞。「た」は《存続》の助動詞「たり」の一部である。これは、続く助動詞との接続の関係で「たる」とあるべきところが撥音便化して「たん」と発音され、「ん」の字を表記していないものであり、「なめり」の「な」と同様の形である。また、この《撥音便無表記》の現象が見られることから、「なり」は《断定》でなく《推定・伝聞》の助動詞だとわかる。（《撥音便

無表記》は、「ラ変型活用語＋《当然》または《推定》系助動詞」の接続の際に限って起こる現象である。）さてこの「なり」の用法の識別としては、「音響・音声・場の雰囲気などを根拠とする表現」のとき《推定》「～のようだ・～と聞こえる」となる。また、「以前に聞いたことを思い出している表現」のとき《伝聞》「～だそうだ・～だという」となる。ここではどちらでも取れないことはないが、わざわざ伝聞表現にする必要性がとくに見受けられないので、《推定》の意の訳出で十分である。さらに、「参る」の「主体」とその補語としての「貴所」が明示されていないので、これを補充する。主体については、後続する表現に「その夜もろともなりし人とゐざり出づるに……」とある点に注目する。「その夜」とは、傍線部そのものが起こった夜を言うのでなく、問題文に先立つ説明から、「以前の特定の夜」を指すと見る。とすると、ある人物の来訪を耳にして以前に特定の体験を共有した女房とともに迎えようというのだから、「以前に言葉を交わした男性」が主体であることになる。解答欄の大きさからここまでの説明はできないので、特定の男性であることがわかる表現なら良しとする。また「貴所」は、つい「宮中」としてしまいがちだが、傍線部の直前に「春ごろ」とある点に注意する。「宮中」での出来事は1行目の「八月」から「秋」のことだとわかっているので、傍線部は宮中とは限らない。また〔注〕から作者は皇族に仕える女房だとわかるので、作者が詰めているところに来る人物は、作者の主人の所へ来たのだということになり、宮中でなく皇族の屋敷であっても謙譲語で表現できるわけだ。したがってここは「この御殿」とでもしておくほかはない。

(二) 「出でさいて」は「出でさして」のイ音便。動詞の音便形の多くは現代語にも共通するが、サ行に活用する動詞のイ音便は、現代語の共通語ではまず使われないので、意識的に憶えておく必要がある。動詞「さす」が接尾語的に補助動詞を作るとき、「（～し）さす」は「（～する）のを途中でやめる・（～し）かけてそのままにする」といった意味になる。現代語でも「読みさしの本」などと言ったりする。「入りぬ」の「ぬ」は連用形接続で終止形になっているので《完了》の助動詞。「（外へ）出るのをやめて」というのだから、はじめは中にいたことがわかり、「入りぬ」は「入った」というよりは「戻った」と言っていることになる。また、前の行に「その夜もろともなりし人とゐざり出づるに」とあることを思い出せば、(一)ウで見たとおり、これは作者と仲間の女房との行為であり、彼女たちの身分を考えれば、「出入り」するのは「部屋・御簾のなか」程度の理解でよい。あとはその理由だが、傍線部直前に「外に人々参り、うちにもれいの人々あれば」とあるので、これを解答欄の許す範囲でまとめればよい。端的に言えば「人がいるから」ということだが、作者も仲間も女房すなわち女性であり、当時の常識からすれば大勢の人に顔をさらすのはなるべく避けたいところであっ

たはずだ。したがって「人目を気にして」ということがわかる表現に言い換えておけばよい。なお、東大入試でこの問題のような「内容説明」と「理由説明」が一度に求められる設問に答えるには、答案の字数を無駄にしないためにも、「理由→帰結」の順にまとめるのがコツである。

㈢ 和歌の解釈に際しては一首全体に目を配るべきだが、さらにいえば、そもそもその和歌が詠まれた状況は「地の文」に説明されているはずだから、和歌の前後を「詞書き」と見て、これも念頭に置くことが肝要である。この文章では、問題の和歌が詠まれる前提として、9行目以降の「男性から『いつか琵琶を聞かせよう』と言われて期待している」という状況をおさえておく必要がある。またその発端としては、はじめの説明文から、「風情ある夜の会話を思い出して」というきっかけもあることに注意。とすると、傍線部直前の「しめやかなる夕暮をおしはかりて参りたりけるに、騒がしかりければまかづめり」というのは、「琵琶を弾いて聞かせるに相応しい、以前のような風情ある雰囲気を期待していた男性が、騒々しいので帰ろうとしている」という状況だとわかる。これに対して、琵琶を聞くことを「ゆかし」く思っている作者は、残念に思うはずである。

以上を踏まえて和歌を見ると、冒頭の「かしまみて」は、〔注〕に示された情報から「かしま」は形容詞「かしまし」を思い出させ、また「かしまみて」には「間見て」が隠されており、「にぎやかさの間を見て」といった意味だとわかる。また地名としての「加島」が「摂津国」にあったことから、「なると」には「鳴戸」の字があてられるが、これはそのまま「（琵琶の音が）鳴る戸口」ということになろう。「こがれいづ」は、直前の「浦」からのつながりでは「（舟を）漕がれ出づ」ともとれ、また演奏を聴くことへの期待を踏まえれば「（胸が）焦がれ出づ」ともとれる掛詞である。「えきや」は「え（動詞連用形）＋き（助動詞終止形）＋や（助詞）」と品詞分解する。「え」は「得」、「き」は《過去》、「や」は《疑問》の係助詞の終助詞的用法である。したがって「心はえきや」で「気持ちはわかったか」と尋ねているのである。以上をまとめたのが解答である。

㈣ 「あの」は遠称指示語で、ここではこの場にいない人物すなわち一件の男性を指す。「すくよかに」は形容動詞連用形で、「健全・実直・真面目であること、さっぱりとしていること」といった語感を持つ。「世の常ならぬ」とは「世間一般とは異なる」の意だが、これに関しては、傍線部の後に「作者や仲間の女房の消息をあれこれと詮索するような真似はしなかった」と述べられているところが、その具体的な現れといってよい。したがって、「世間一般」とは「女性の消息をしつこく聞いて回る、女性につきまとう」といっ

たことがらを意味していることになる。解答欄が小さいので、ひとことで「好色」とでもしておけば十分だろう。「好色」と「実直」とは対比的表現である。傍線部に書かれた順番では「実直であって好色ではない」となっているが、対比を際だたせるには、結果的に否定されるほうを先に書いておくと、僅かながら字数も縮められる。解答のようなまとめかたのほうが適切であろう。